



第10号：平成27年2月2日 俵屋宗達 —— 3

宗達については、その全体像が不明な点が多く、色々な情報を持っている今日の私たちだが、彼の全体像を解明しきれものではない。その情報もごく近年になって少しずつ明らかになってきているのであって、まだまだ完全なものでない。

簡単な例を挙げると、江戸後期の酒井抱一は尾形光琳について、今日の私たち以上に知っていたと考えて良いだろう。何故なら、抱一は光琳に近い所にいたからである。しかし、宗達のこととなるとどうであろう。むしろ、私たちのほうが宗達に関する情報量が多いことは疑えない。宗達の作品についてもデジタル画像で眼にすることは簡単である。しかし、抱一の時代では、宗達の作品を眼にすることがあっても、それは運搬可能な小品であって、屏風や襖、杉戸絵などの大画面を江戸の地で実見することは不可能に近いことでは確かであった。

抱一は、尾形光琳に私淑し、光琳評価を決定的なものにしたが、宗達に私淑するには至っていなかった、といえよう。何故なら、抱一の門人たちの作品に宗達の影すら伺えないからである。「琳派」についてイメージする時、宗達を除外してイメージすることはできない。それは、光琳が宗達に私淑していたことを確信しているからである。宗達の全体像は時の方に消えてしまっているが、僅かに遺された宗達の痕跡を辿ることにより、宗達の実像を創りだしてみることも必要なのである。

